

二〇二六年度 大学入学共通テスト 解説〈古典〉

第4問 古文 『うつほ物語』

〔出典〕

『うつほ（宇津保）物語』は、平安時代中期（十世紀末）成立の物語。作者未詳。『源氏物語』（西暦一〇〇〇年頃成立）よりも早くに成立した物語には、歌物語三つ（『伊勢物語』・『大和物語』・『平仲物語』）、作り物語三つ（『竹取物語』・『うつほ物語』・『落窪物語』）があるが、作り物語の内、『竹取物語』が超現実的伝奇作品、『落窪物語』が写實的に貴族の生活を描いた作品であるのに対し、『うつほ物語』はその両方の性格を持った長編物語となっており、『源氏物語』にも大きな影響を与えた作品であると言える。

作品冒頭では、清原俊蔭という人物が唐に渡ろうとして漂流の果てに辿り着いた波斯（はし）国で仙人から琴の秘技を伝授され、帰国後に琴の秘技を娘（尚侍のおとど・尚侍）に伝える。その娘と恋に落ちる貴公子が右大将（「大将のおとど」）で、この二人の間に生まれたのが今回本文に登場する「仲忠（中納言）」である。しかし、その後、右大将は家柄の問題などから妻子を顧みることができず、困窮を極めた母子は、山奥の太木に空いた「うつほ（穴）」で暮らすことになり「書名の由来となる話」、琴の秘技は母から子へ伝えられる。十五年後、右大将は帝の行幸に供奉していた折、琴の音を耳にして母子を見つけ、すぐに呼び寄せて共に暮らす。その後、俊蔭の娘は右大将の北の方（「正妻」となり、仲忠は琴の秘技もあって宮中で評判の貴公子となり、帝の娘（「宮」と結婚、二人の間には子（「いぬ」）も生まれて一族は繁栄してゆく。

今回問題本文となっているのは、「仲忠」と「宮」の間に生まれた「いぬ」に、「尚侍のおとど」から「俊蔭」が持ち帰った秘琴「龍角」が誕生祝いとして贈られる場面であり、問5の引用文は、その折のことを、その場に居合わせた右大臣「「宮」の祖父」が帝「「宮」の父」に報告している場面である。

〔通釈〕

〔問題本文〕

中納言「「仲忠」が、「あの龍角」「「琴の名」は、頂戴して、いぬ「「中納言と宮の子」の御守りにいたしましたしょう」（とおっしゃる）。尚侍のおとど

「仲忠の母」が、微笑んで、「早すぎるわよ、また（そんな）。それにしても、このような（まだ子どもが生まれたばかりの）折にそのように言ういわれでもあるのですか」とおっしゃると、（中納言は）「世間一般のことは、どうでしょうか（知りません）。（しかし、）この琴の一族がいる所で、琴の音がする所には、天人が（天空を）飛んで来てお聞きになるようですから、（この子の）そばに置いてやろうと思って申し上げるのです」（とおっしゃる）。尚侍のおとどは、典侍「女官の一人」を介して、大将のおとど「仲忠の父・尚侍のおとどの夫」に、「例の、私の琴が、ここが必要とされているようです。（わが孫に）与えましょう」と申し上げなされたので、（大将のおとどは）急いで三条殿「仲忠の両親の邸」にいらっしやって、（その琴を）取らせて戻っていらっしやった。

三の宮「宮の兄弟」が、（その琴を）お受け取りなつて、中納言にお渡しになったところ、（その琴は）中国風の刺繍がされた袋に入っていた。（中納言は）赤ん坊「いぬ」を懷に抱いたまま、（袋から）琴を取り出しなされて、「長年、この琴の奏法をどうしましょうか（伝えるべき後継者がいない）と嘆いていたのですよ。後々のこと（この子に伝えられるかどうか）は分からないけれど」などとおっしゃって、「ほうしよう」という曲を、はなやかに弾いた。その琴の音は、たいそう誇らしげでにぎやかではあったけれども、一方で、しみじみとしてぞつとするほどでもあった。さまざまな音がいくつも入り乱れ、（たくさんの）琴の音が響き合ったかのような音は、（近くで）向かい合つて聞くだけのものではなく、はるか遠くにまでも響き渡った。

中納言が、このような（子が誕生した）時にふさわしい曲を、音も高らかに弾くと、風がとても荒々しい音を立てて吹く。空の様子が騒がしくなるように思われるので、「例によって、あやしい物」「鬼神」が（現れそうだ）、（天変地異が起こりそうで、琴に）手を触れがたいことだよ。わずらわしい」と思つて、弾くのをやめて、尚侍のおとどに（このように）申し上げなされる。「今、曲を一曲弾き申し上げようとしたのですが、（天が）騒がしいので、（弾くことが）できません。（母上が）御自らこの琴を一つお弾きになって、鬼神を退散させてください」と（中納言が）申し上げなされると、（尚侍のおとどは）「私が弾くのは）体裁が悪いように思います」（とおっしゃる）。中納言の君が、「母上のお琴を聞かせていただくのに）私にとっては、これ以上の機会はございませんでしょう」と申し上げなされると、尚侍のおとどは、御帳台の台座からお下りになって、琴をお取りになり、一曲お弾きになる。その音色は、まったく言うようもないほどに素晴らしい。中納言の演奏は、趣深さがありつつも陰しくまでも感じられ、（その音が響く）雲や風の様子が、普通とは違つて見えるほどだが、この（尚侍のおとどの）演奏は、病気の者や、何かに脅え、力をなくしてしまっている人も、この音を聞くと（そのつらさを）すっかり忘れて、楽しく勇気づけられ、寿命が延びるような気持ちになる。そうであるから、宮は（出産直後ではあるが）、（尚侍のおとどの）琴をお聞きになったところ、普段そうでいらつしやったよりも（さらに）若々しく、大変なおつとめ（＝出産）をなさったともお思いにならないほどで、つらいこともなくて起きて座つていらつしやる。中納言の君が、「（起きるのは体に）よくないと思われます。まだ横におなりになったままでお聞きください」と申し上げなされると、宮は、「ただ今はつらくありません。この（お母上の）お琴を聞きましたので、苦しかったことも、すべて消えてしまいました」とおっしゃって座つていらつしやる。女御の君「宮の母」と尚侍のおとどが、「風邪をおひきになってしまふでしょう」とおっしゃって、大騒ぎして（宮を）

寝かせ申し上げなされた。琴は、弾き終えなされたので、袋に入れて、宮の枕元に、御佩刀「〓守り刀」を添えて置いた。

【問5 引用文】

(右大臣) 「尚侍「〓尚侍のおとど」などが琴を弾きました時は、興味がございましたよ。本当にめったに聞けないような演奏でございましたよ」

(帝) 「その琴は、どの琴か」

(右大臣) 「尚侍が、昔から弾いておりました龍角だとうかがいました。それを、あの子に与えてしまったのです」

(帝) 「実にたいへんな秘琴をもらった女の子であるよなあ」

【解説】

問1 語句解釈の問題（選択肢は昨年度から四つになった）

短い語句の意味を問う設問は、「センター試験」以来、「大学入学共通テスト」（以下、「共通テスト」）になってからも、毎年度、問1で出題されている。

重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 基礎

「騒がしければ、えなむ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「騒がしけれ／ば／え／なむ」と単語分けされる。

「騒がしけれ」は、形容詞「騒がし」の已然形。「ば」は、未然形に接続して仮定条件（〓〓ならば・〓したら）、已然形に接続して確定条件（〓〓ので・〓すると・〓したところ）を表す接続助詞で、ここは「騒がしけれ」が已然形であるので、確定条件を表している。これが正しいのは①と②の「〓ので」。③と④の「〓たら」は仮定条件の訳で正しくない。「え」は、打消表現と呼応して不可能（〓〓できない）を表す副詞で、ここは後方にあるべき打消表現「弾かぬ」などが省略されていると考える。選択肢で、不可能を訳しているのは、①と③の「できません」。②と④の「やめてください」は禁止の訳で正しくない。「なむ」は、強意（訳さなくてもよい）の係助詞（結びの語を連体形にする係り結びを起こす）である。

よって、正解は①である。

正解 ②③ ①

(イ) 基礎

「はしたなげにぞあめる」の解釈として最も適当なものを選べ。

「はしたなげに／ぞ／あ／める」と単語分けされる。

「はしたなげに」は、形容動詞「はしたなげなり」の連用形。ほとんどの形容詞は「ゝげなり」が付くと形容動詞となり「ゝな様子だ」の意を表す。「はしたなげなり」も「はしたなし」が形容動詞になった語。「はしたなし」は「体裁が悪い・みつともない」「中途半端だ」「(雨風が)はげしい」などと訳す語であるから、選択肢で「はしたなげに」を正しく訳しているのは③の「体裁が悪いように」だけである。「ぞ」は、強意(訳さなくてもよい)の係助詞(結びの語を連体形にする係り結びを起こす)。「あめる」は、ラ行変格活用動詞「あり」の連体形「ある」に、推定の助動詞「めり」の連体形「める」が付いた「あるめる」が撥音便によって「あんめる」となり、「ん」が無表記になって「あめる」となっている状態(「める」が連体形なのは「ぞ」による係り結びによる)。推定の助動詞「めり」は、一般に「ゝようだ・ゝと思われる・ゝと見える」などと訳されるので、この訳が正しいと言えるのも、③の「ゝに思います」だけである。

よって、正解は③である。

正解 ②③ ③

(ウ) 基礎

「風邪ひきたまひてむ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「風邪／ひき／たまひ／て／む」と単語分けされる。

「たまひ」は、「おゝになる・ゝなさる」などと訳す、尊敬の補助動詞で、これが正しいのは①と④の「おゝになる」。②と③の「ゝ申し上げ」

るは謙讓の補助動詞の訳であるから正しくない。「てむ」は、完了・強意の助動詞「つ」の未然形「て」に、推量・意志などの助動詞「む」の終止形が接続している状態で、組み合わせると「～てしまっだろう・きつ～だろう」（完了・強意＋推量）、「～てしまおう・必ず～しよう」（完了・強意＋意志）などと訳すことになる。これが正しいのは④の「～てしまっでしょう」「～でしょう」は「だろう」の丁寧な言い方 だけである。

よって、正解は④である。

正解 25 ④

問2 語句と内容に関する説明問題 基礎 （選択肢は例年の五つから四つに減った）

波線部 a～d について、語句と内容に関する説明として最も適当なものを選べ。

「共通テスト」になってからは、問2では概ね、「語句と表現」に関する説明問題が出題されている（二〇二五年度は「敬語の種類と敬意の方向」だった）。本年度は「語句と内容」に関する説明問題となっているが、ほぼ文法・敬語の知識で正解は得られる。

① 波線部 a は「聞こゆる／なり」と単語分けされる。

「聞こゆる」は、ヤ行下二段活用動詞「聞こゆ」の連体形。「なり」は、連体形に接続しているので断定の助動詞の終止形である。よって、①が、この「なり」を「伝聞」とし、「話に聞いていることを表している」と説明しているのは誤り。伝聞・推定の助動詞「なり」は、主に終止形に接続するので、「聞こゆ」に接続すると「聞こゆなり」となるはずである。

なお、この「聞こゆるなり」は、「琴の一族がいる所で、琴の音がする所には、天人が天空を飛んで来てお聞きになるようですから、この子のそばに龍角を置いてやろうと思って、申し上げるのです」という意味で、①が説明しているようなことを「聞く」という意味ではない。「聞こゆ」は、一般動詞として「聞こえる・噂される」、謙讓語として「申し上げる・～申し上げる」と訳す動詞である。

③ 波線部 c は「いかに／し／はべら／む」と単語分けされる。

「はべら」は、ラ行変格活用動詞「はべり」の未然形。「はべり（侍り）」は、主に丁寧語として「あります・おります・ございます」「～です・～ます・～でございます」、謙讓語として「貴人・高貴な場所に）お仕えする・控え申し上げる」と訳すが、波線部 c では、サ行変格活用動詞「す」の連用形「し」に付いて使われているので、丁寧の補助動詞である。「お仕えする・控え申し上げる」という謙讓語の意味がここにあるとは考えられない。

よって、③が、この「はべら」を「謙譲語」と説明しているのは誤り。

なお、波線部c「いかにしはべらむ」は、「尚侍のおとど」から「龍角」という秘琴を受け取った「仲忠」が、「長年、この琴の奏法をどうしましうかと嘆いていたのですよ」と「尚侍のおとど」に言っているものであり、③の「自身の琴の演奏を卑下する」という説明も正しくない（「卑下する」は謙譲語の説明）。ただし、会話部分にある丁寧語は、話し手から、話の聞き手に対する敬意を示すので、「仲忠からの尚侍のおとどに対する敬意を表している」という説明に誤りはない。

④ 波線部dは「臥さ／せ／たまひ／て／聞こしめせ」と単語分けされる。

「聞こしめせ」は、「お聞きになる」と訳す、尊敬の動詞「聞こしめす（聞こし召す）」の命令形で、「お聞きください」と訳される。会話部分にある尊敬語は、話し手から、動作主体（ここでは「聞く」という動作の主体）に対する敬意を示すが、「聞こしめせ（＝お聞きください）」と言われた人は、直後で返答している「宮」であろうから、「聞く」という動作の主体は「宮」である。つまり、「聞こしめす」は、話し手「仲忠」から、動作主体「宮」への敬意を示していることになる。よって、④が、敬意の対象を「尚侍のおとどに対する」と説明しているのは誤り。

なお、ここで「仲忠」は、「宮」に対して、「（起きるのは体に）よくないと思います。（尚侍のおとどの琴は）横におなりになったままでお聞きください」と言っており、それに対して宮は、「今はつらくありません。尚侍のおとどのお琴を聞きましたので、苦しかったことも、すべて消えてしまいました」と答えているのである。

以上のように、①の「なり」の意味の誤り、③の「はべら」の敬語の種類の誤り、④の「聞こしめせ」の敬意の対象の誤りに気がつけば、わりあい早く、消去法で②が正解であることがわかる。

② 波線部bは「取ら／せ／む」と単語分けされる。

「せ」は、使役の助動詞「す」の未然形。「取らす」で「（相手に）取らせる」と直訳されることになるが、つまり「やる・与える・渡す」の意である。「む」は、推量・意志などの助動詞「む」の終止形である。波線部bを含む「かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。取らせむ」は、「仲忠」から「龍角」をわが子「いぬ」の御守りとしてほしいと言われた「尚侍のおとど」が、「例の、私の琴」「龍角」が、ここで必要とされているようです。（わが孫に「龍角」を）与えましよう」と言っているのである。よって、②は、助動詞「む」の説明も、また、「仲忠の願いを聞き入れ自分の琴を与えようと尚侍のおとどが思っていることを表している」という説明も正しいことになる。

以上から、正解は②である。

なお、③・④に関わる「敬意の方向」については、次のようなルールがあるので、覚えておかななくてはならない。

まとめ 敬意の方向のルール

◎ 「誰から」の敬意か

- ・地の文（会話文でない箇所）にある敬語は、作者（筆者・書き手・語り手）から。
- ・会話文中にある敬語は、その会話主「話し手」から。

◎ 「誰へ」の敬意か

- ・尊敬語は、その動作の主体「主語」へ。
 - ・謙譲語は、その動作の受け手「相手」へ。
 - ・丁寧語は、その丁寧語を含む部分の聞き手へ。
- （会話文中にある丁寧語は、その会話の聞き手へ。地の文にある丁寧語は読者へ。）

正解

26

②

問3 第二段落に関する内容合致問題（選択肢は四つ）

1 段落に描かれる琴をめぐるやり取りに関する説明として最も適当なものを選べ。

① 「自分といぬがこれからも大切に守り続けてゆくと誓った」が誤り。「仲忠（中納言）」が第一段落一行目で言っている「かの龍角は、賜はりて、いぬの守りにしはべらむ」は、「あの龍角は、頂戴して、いぬの御守りにいたしましょう」という意味である。「し」は、サ行変格活用動詞「す」の連用形。「はべら」は、丁寧の補助動詞「はべり」の未然形。「む」は、意志の助動詞の終止形である。「龍角を生まれた子の御守りにしよう」というのである。よって、①の説明は正しくない。

② 「仲忠」の「龍角を生まれた子の御守りにしよう」という提案を聞いた「尚侍のおとど」が言っている「いつしかとも、はた」（第一段落一行目）は、「早すぎるわよ、また（そんなことを言うなんて）」といった意味である。「いつしか」は、古文では「早くも・早く・早すぎる」といった意

味を表す副詞（もしくは形容動詞の語幹）である。②の前半の説明は①で見た内容に相当しており、後半の「誕生早々に気が早いことだと言った」も正しいので、②が正解である。

③ 「一般的なことなので」が誤り。「仲忠（中納言）」が第一段落二行目で言っている「おほかたのことは、いかがはべらむ」は、「世間一般のこととは、どうでしょうか（知りません）」という意味である。「おほかた」は、「一般・大体・おおよそ」といった意味である。よって、「仲忠（中納言）」が「生まれた子に琴を添えるのは一般的なことなので」と述べたとする③の説明は正しくない。「尚侍のおとど」から「生まれたばかりの子に龍角を授けるのは」早すぎないか（②参照）と言われた「仲忠（中納言）」は、「世間一般はどうか知らないけれど」と前置きして、「この琴の族ある所、声する所には、天人の翔りて聞きたまふなれば、添へたらむとて聞こゆるなり（＝この琴の一族がいる所で、琴の音がする所には、天人が天空を飛んで来てお聞きになるようですから、この子のそばに龍角を置いてやろうと思って申し上げるのです）」と言っているのである。

④ 「相談の上で」が誤り。第一段落三～四行目に「尚侍のおとど、典侍して、大将のおとどに、『かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。取らせむ』と聞こえたまへれば」とあるのは、「尚侍のおとどは、典侍を介して、大将のおとどに、『例の、私の琴「龍角」が、ここで必要とされているようです。与えましょう』と申し上げなされたので」という意味である。「して」は使役の対象（＝誰にやらせるか）を示す格助詞。ここには使役の助動詞はないが、前後の内容から、「尚侍のおとど」が「典侍」を介して「大将のおとど」に「龍角」を「三条殿」に取りに行くように頼んだと考えるべきである。よって、④の「尚侍のおとどと典侍は、相談の上で」は説明が正確ではない。

以上から、正解は②である。

正解 27 ②

問4 第二段落・第三段落に関する内容合致問題（選択肢は五つ）

2 段落と 3 段落に描かれる仲忠と尚侍のおとどの琴の演奏に関する説明として最も適当なものを選べ。

2 段落に描かれている「仲忠（中納言）」の様子は次のとおり。

(1) 「仲忠（中納言）」は、「児を懷に入れながら、琴を取り出で（＝「いぬ」を懷に抱いたまま、袋から琴を取り出し）て、「年ごろ、この手をいかにしはべらむと思ひたまへ嘆きつるを。後は知らねど（＝長年、この琴の奏法をどうしましょうかと嘆いていたのですよ。後々のことはわからないけれど）」と言って「はうしやう」という曲を弾いた。この「仲忠（中納言）」の言葉は、厳密に言うと「祖父から母、母から自分へ伝

えられた奏法を、自分が伝えるべき後継者がいなかったことを嘆いていたが（今は伝えるべき「いぬ」が生まれて一安心できた）、将来実際に「いぬ」に伝えられるかどうかはわからないが」という意味である。

(2) 「仲忠（中納言）」は、琴を「はなやかに」弾き、その音は「いと誇りかににぎはしきものから、また、あはれにすこし。よろづの物の音多く、琴の調べ合はせたる声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり（「たいそう誇らしげでにぎやかではあったけれども、一方で、しみじみとしてぞっとするほどでもあった。さまざまな音がいくつも入り乱れ、たくさんの方の音が響き合ったかのような音は、近くで向かい合って聞くだけのものではなく、はるか遠くにまでも響き渡った）」というものであった。「すこし」は、「恐ろしい・ぞっとするほどだ」「ぞっとするほどに素晴らしい」の意の形容詞である。

3 段落に描かれている「仲忠（中納言）」の様子は次のとおり。

(3) 「仲忠（中納言）」は、子の誕生に際して弾くのに相応しい曲（注9参照）を「音高く」弾いたが、「風いと声荒く吹く。空のけしき騒がしげなれ（「風がとても荒々しい音を立てて吹く。空の様子が騒がしくなるように思われる）」という状態になったので、「例の、物、手触れにくきぞかし。わづらはし（「例によって、あやしい物」「鬼神」が（現れそうだが）、手を触れがたいことだよ。わづらわしい）」と思い、弾くのをやめた。以前と同様に天変地異などの不思議な現象が起きそうだったので（注10参照）、嫌な気持ちになって琴を弾くのをやめたのである。

(4) 「仲忠（中納言）」は、(3) のことについて、母「尚侍のおとど」に、「今、曲一つ仕うまつらむとすれど、騒がしければ、えなむ（「今、曲を一曲弾き申し上げようとしたのですが、天が騒がしいので、弾くことができません）」と説明し、続けて「これに御手一つ遊ばして、鬼逃がさせたまへ（「母上自らこの琴を一つお弾きになって、鬼神を退散させてください）」と言って、「尚侍のおとど」に「龍角」を弾くように促した。

(5) 琴を弾くことをためらう「尚侍のおとど」に、「仲忠（中納言）」は、「仲忠がためには、これにまさる折なむはべるまじき（「私にとっては、これ以上の機会はありませんでしょう）」と言って、さらに琴を弾くように「尚侍のおとど」に促した。

(6) 語り手は、「仲忠（中納言）」の琴の演奏について、「おもしろく凝しきまで、雲風のけしき、色殊なる（「趣深さがありつつも険しくまでも感じられ、雲や風の様子が、普通とは違って見えるほどだ）」と説明している。「凝し」については、本文注12に「険しい」の意であると書かれている。

そこで、これらを踏まえて、「仲忠の琴の演奏」について説明している選択肢①～③を見てみる。

①は、「得意になるあまり」と「誇らしげな歌声を交えて」が誤り。子が生まれて「仲忠（中納言）」が喜んでいる様子は、本文全体から読み取れ

るが、「得意になるあまり」といった態度になっていることは読み取れない。また、琴に合わせて「歌」を歌っている様子もない。

②は、ほとんどの説明が、右で見た(2)・(3)・(6)の内容に相当しているが、「鬼を追い払うほどの」は誤り。(4)で見たように、「仲忠(中納言)」は「自分が弾くと鬼神が現れて天変地異が起きそうだから、母上が弾いて鬼神を追い払ってほしい」と言っているのであるから、「仲忠(中納言)」の琴の音は、「鬼」を呼び寄せる力はあっても、「鬼を追い払う」効果はないのである。

③は、「尚侍のおとどはいつものことながら仲忠が琴を弾くのはやっかいなことであると思った」が誤り。(3)で見たように、「例の、物、手触れにくきぞかし。わづらはし(＝例によって、あやしい物「鬼神」が(現れそうだ)、手を触れがたいことだよ。わづらわしい)」と思ったのは、「仲忠(中納言)」自身であり、「尚侍のおとど」ではない。

次に、「尚侍のおとど」について見てみる。

2 段落には「尚侍のおとど」の様子を描いている箇所はない。

3 段落に描かれている「尚侍のおとど」の様子は次のとおり。

(7) 「仲忠(中納言)」に琴を弾くように促された「尚侍のおとど」は、「はしたなげにぞあめる(＝体裁が悪いように思います)」と言ったためだったが、「仲忠(中納言)」から、「仲忠がためには、これにまさる折なむはべるまじき(＝私にとっては、これ以上の機会はございませんでしょう)」と言われると、「御床」から下りて、琴を弾き始め、その音は「さらに言ふ限りなし(＝まったく言いようもないほどに素晴らしい)」というものであった。

(8) 語り手は、(6)で見た「仲忠(中納言)」の琴の演奏の特徴と比較して、「尚侍のおとど」の琴の音を、「病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば皆忘れて、おもしろく頼もしく、齢榮ゆる心地す(＝病気の者や、何かに脅え、力をなくしておれている人も、この音を聞くとそのつらさをすっかり忘れて、楽しく勇気づけられ、寿命が延びるような気持ちにさせられた)」と説明している。

(9) 「尚侍のおとど」が弾く琴の音は(8)で見たように病人も癒やす音であったから、「宮」も、出産直後ではあったが、その音を聞くと「ただにおはしつるよりも若やかに、わざをしつると思されず、苦しきこともなく(＝普段よりも若々しく、出産をなさったとも思っていないほどで、つらいこともなく)」で、起き上がって座って聞いている。夫「仲忠(中納言)」は心配したが、「宮」は「ただ今は苦しいもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも、皆やみぬ(＝今はつらくありません。お母上のお琴を聞きましたので、苦しかったことも、すべて消えてしまいました)」と言って座っていた。母たち「女御の君・尚侍のおとど」が、「風邪ひきたまひてむ(＝風邪をおひきになってしまおうでしょう)」と言って「宮」を寝かせた。

④は、前半の説明は(5)の内容に、後半の説明は(7)の内容にそれぞれ相当しており、説明に誤りはない。よって、④が正解である。

⑤は、「宮自身も演奏に参加した」が誤り。「尚侍のおとど」の琴を聞いた「宮」については(9)で見たとおりで、⑤の説明のほとんどは正しいことになるが、「宮自身も演奏に参加した」とは、本文のどこにも書かれていない。「宮」は母たちに促されて再び横になったのである。

以上から、正解は④である。

正解 28 ④

問5 問題本文と引用文に関する内容合致問題（選択肢は五つ）

次に示すの「Ⅱ引用文」は、本文の場面に居合わせた右大臣が、後日、帝にその折のことを報告している際の会話である。これを読んで、この会話と本文に関する説明として最も適当なものを選べ。

複数の本文「二〇二二年度・二〇二五年度」、もしくは、本文と引用文「二〇二二年度・二〇二三年度・二〇二四年度は現代文の解説」を比較して考える問題は、「共通テスト」になってからの新傾向の問題。本文とは別作品との組み合わせや、和歌集の和歌等との組み合わせでの出題がほとんどであったが、本年度は本文と同作品の別箇所が問5に引用されて出題された。また、この組み合わせ問題は、出題形式が、複数の人物（教師・生徒など）の会話に関する空欄補充問題「二〇二二年度・二〇二三年度・二〇二五年度」や解説文の空欄補充問題「二〇二二年度・二〇二四年度」として出題されることが多かったが、本年度は一般的な内容合致問題であった。

① 指摘されている「いとありがたかりけることぞや」は「本当にめったにないような演奏でございましたよ」という意味である。①の説明は、「や」の説明も含めてほとんど誤りがないが、「琴の一族以外の人の前で」は誤り。問4の解説の(7)で見たように、「尚侍のおとど」は「はしたなげにぞあめる（＝体裁が悪いように思います）」と言って弾くのをためらっただけで、「琴の一族以外の人の前で」という理由で演奏を拒んだわけではない。

② 指摘されている「その琴は、いづれぞ」は「その琴は、どの琴か」という意味である（実際は「仲忠の祖父俊蔭が異国から持ち帰ったいくつもの秘琴のうちのどの琴か」という意味）。②の説明は、前半は概ね推測できることと言えるが、「世間の嘆きの声」は誤り。問4の解説の(1)で

見たように、「年ごろ、この手をいかにしはべらむと思ひたまへ嘆きつる（＝長年、この琴の奏法をどうしようかと嘆いていた）」のは「仲忠（中納言）」である。この「嘆き」は厳密には、祖父から母、母から自分へ伝えられた琴の奏法について「後継者が長年不在であったことに対する」（②）嘆きであると言えるが、「仲忠（中納言）」の嘆きであって、「世間」の嘆きではない。

③ 指摘されている「尚侍の、昔より弾きはべりける龍角」は「尚侍が、昔から弾いておりました龍角」という意味である。「龍角」については、本文全体で語られ、「仲忠（中納言）」も「尚侍のおとど（＝尚侍）」もこれを弾いているが、③の「幼い仲忠とともに弾いた思い出の楽器」や「仲忠は龍角の演奏を聴いて幼少時を思い出していた」は本文のどこにも書かれていない内容である。

④ 指摘されている「それをなむ、かの児になむ」は「それを、あの子に（与えたのです）」という意味である。二つある「なむ」は、いずれも強意の係助詞。ここでは「それ」「龍角」と「かの児」「いぬ」に付いて、「あの素晴らしい龍角を、まだ生まれたばかりのいぬに」という強調をしているのであるから、④の「龍角を誕生直後のいぬに与えるのは特別なことだと分かる」という説明に誤りはない。また、問4の解説の（1）で見たように、「仲忠（中納言）」は「児」「いぬ」を「懷（ふところ・胸）」に抱いたまま、「龍角」を袋から出して弾いているから、④は後半の説明にも誤りはない。

よって、④が正解である。

⑤ 指摘されている「いといみじきもの得たりける女子にもあるかな」は「実にたいへんなもの（＝秘琴）をもらった女の子であるよなあ」という意味である。これは、「仲忠（中納言）」と「宮」の間に生まれた「いぬ」が、祖母に当たる「尚侍のおとど」から「龍角」を贈られたことについて、帝が驚いているのである。ここからは「龍角」が大変貴重な楽器であることはわかるが、「尚侍のおとどが並外れた琴の奏法を持ち合わせていることが分かる」とは言えない。もちろん「尚侍のおとどが並外れた琴の奏法を持ち合わせている」という事実はあるが、「帝の発言から」そのことがわかるわけではない。また、⑤は「尚侍のおとどの演奏が仲忠の演奏以上に賞賛されていた」も正確さに欠ける。問4の解説の（6）（8）で見たように、「仲忠（中納言）」の演奏は「趣深さがありつつも陰しくまでも感じられ、雲や風が普通とは違って見えるほどである」のに対し、「尚侍のおとど」の演奏は「病人や力のない人につらさを忘れさせ、楽しく勇気づけ、寿命が延びるような気持ちにさせる」という違いがあることは述べられているが、両者を比べて「尚侍のおとどの演奏」のほうが「仲忠」以上に「賞賛されていた」わけではない。

以上から、正解は④である。

正解

29

④

第5問 漢文

ながのほうざん
長野豊山『松陰快談』

〔出典〕 長野豊山『松陰快談』

長野豊山（一七八三～一八三七年）は、江戸時代後期の漢学者。伊予の国（現在の愛媛県）の生まれ。大坂で中井竹山（一七三〇～一八〇四年）に学び、江戸では昌平坂学問所で朱子学を学んだ。伊勢神戸藩、川越藩、松代藩などで藩儒をつとめ、詩文の才能で知られた。

〔書き下し文〕

〔本文〕

客余に問ひて曰はく、「子は詩を学ぶに、唐か、宋か」と。曰はく、「我は必ずしも唐ならず、必ずしも宋ならず、又た必ずしも唐宋ならずんばあらず。見るべし、不必の二字、是れ我が宗旨なり」と。

東坡云ふ、「詩を作るに此の詩を必とするは、定めて詩人に非ざるを知る」と。知言と謂ふべし。窃かに世の詩流を視るに、詩の巧拙を問はず、同じきに党し異なるを伐ちて、忿争すること狂ふがごとし。是れ狹見の然らしむと雖も、亦た已だ駭ならずや。

人の口を極めて白石・南郭を罵りて、以て偽詩と為す有り。余其の詩を觀んことを請ふ。意を立つること陳腐にして、但だ多く生字を用ゐて、以て其の拙を掩ふのみ。余因りて謂ひて曰はく、「白石・南郭は誠に偽詩を作り、吾子は誠に真詩を作る。然れども吾子の詩は、譬へば真瓦なり。二子の詩は、譬へば偽玉なり。真瓦の価、廻かに偽玉の下に在り」と。

〔資料〕

余は詩に於いて偏好する所無し。其の風調の異同を問はず、佳き者は之を取る。但だ生硬・拙俗にして、諷詠するに韻致無き者は、名人の作る所と曰ふと雖も、我は則ち取らざるなり。

〔通釈〕

〔本文〕

（ある）客人が私に尋ねて言った、「あなたは詩を学ぶにあたって、唐詩を手本としていますか、（あるいは）宋詩を手本としていますか」と。（私は、こう）言った、「私は必ずしも唐詩を手本とはせず、（また）必ずしも宋詩を手本ともせず、かといってまた必ずしも唐詩も宋詩も（どちらも）手本としない

ということもない。わかってもらいたい、『不必（必ずしも…ない）』の二字、これが私の主要な見解（にかかわる大事な点）である」と。

（北宋の大詩人）蘇東坡は（こう）言っている、「詩を作るにあたって、このような詩でなければならないとするような人は、明らかに詩人ではないとわかる」と。見識のある言葉というべきである。卑見ながら世の詩人たちの風潮を見ると、詩の上手い下手を争うのでなく、同じ考えの者をひいきして、異なる考えの者を攻撃し、狂ったように怒り争っている。これは狭隘な見識がそうさせる（こと）とはいえ、なんと愚かなことであろうか。

（ある）人で、口を極めて白石や南郭をのしり、（白石や南郭の詩は）偽物の詩であると言う者がいた。私はその人自身の詩を見せてくれるように求めた。（それを見ると、その詩は）主題の立て方が陳腐（ありふれていて平凡）で、ただただ（珍しく）見ない字や言葉を多用して、稚拙さをかくそうとしているだけ（のもの）であった。私はそこでその人に言った、「白石や南郭はまことに偽物の詩を作り、あなたはまことに本物の詩を作っている。しかしあなたの詩は、たとえば本物の素焼きの器物のようなものだ。（それに対して、白石・南郭の）二三の詩は、たとえば偽物の宝玉のようなものだ。（比べるとして）本物の素焼きの器物の価値は、偽物の宝玉よりはるかに下なのだ」と。

【資料】

私は詩に関しては、かたよって好むところはない。その詩風の違いを問わず、よいものは受け入れる。ただ（その）表現が未熟であったり、稚拙であったり、朗唱するにあたって気品や風情がないものは、たとえ名声の高い人物が作ったものであっても、私は受け入れないのである。

【解説】

問1 語の意味の判断の問題

(ア) 基礎

(イ) 基礎

波線部(ア)・(イ)のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「宗旨」は、一般的には、宗門の教義の趣旨、あるいは宗門・宗派といった宗教的な意味で耳にすることが多い語であるが、「ここでの意味」は、むしろそういうことではない。辞書的には、「自分の主義・趣味・嗜好など」といった意味がある。たとえば、「宗旨がえをする」という言い方のように、ここは、文脈（話の流れ）から見て、ある人に「唐詩派ですか、宋詩派ですか」と尋ねられた筆者が「自分の考え、立場」を答えているところである。よって、正解は④「主要な見解」である。

(イ)「知言」も、辞書的には「道理をわきまえた言葉」であるが、「宗旨」同様、文脈から考える問題である。ここは、蘇東坡の言葉を「是（よし）」

としているのであるから、①「見識のある言葉」が適当である。

②ではマイナス評価になり、③のように「よく聞く言葉」でも、④のように「自明（明白）の言葉」でもない。

正解 (ア) 30 ④ (イ) 31 ① (各4点)

問2 傍線部の内容説明の問題 標準

傍線部 A 「我 不_ニ必_一唐、不_ニ必_一宋、又不_ニ必_一不_ニ唐_一宋」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

「我は必ずしも唐ならず、必ずしも宋ならず、又た必ずしも唐宋ならずばあらず」は、「私は必ずしも唐詩を手本とはせず、必ずしも宋詩を手本とせず、（かといって）また必ずしも唐詩も宋詩も（どちらも）手本としないのでもない」という意味である。つまり、「唐詩」「宋詩」のどちらをとるというのではないが、どちらもとらないということでもない、という柔軟な考え方を言っている。

とすると、選択肢の中間部は、③の「絶対視せず」、後半部も、③の「決して学ばないのでもない」が適当である。

「不_ニ必_一A」（かならずしもAせず）は、「必ずしもAしない。必ずAするとは限らない」と訳す部分否定の形、「不_ニ必_一不_ニA」（かならずしもAせずンバアらず）は、「必ずしもAしないわけではない」と訳す二重否定の形である。

- ① 豊山は詩を学ぶ上で、唐詩も宋詩も大切なので、唐詩と宋詩のいずれをも学ぶ必要があると説いている。 x
- ② 豊山は詩を学ぶ上で、唐詩も宋詩も必要でなく、唐詩でも宋詩でもない詩を学ぶのがよいと説いている。 x
- ③ 豊山は詩を学ぶ上で、唐詩も宋詩も絶対視せず、唐詩や宋詩を決して学ばないのでもないと言っている。 ○
- ④ 豊山は詩を学ぶ上で、唐詩も宋詩も重要視せず、唐詩や宋詩以外の詩を学ぶことも不要だと説いている。 x

正解 32 ③ (6点)

問3 返り点の付け方と書き下し文との組合せ問題 標準

傍線部B「是雖狭見使然」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、「センター試験」時代から頻出する形式なのであるが、ポイントとは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身など、何らかの句法上の読み方の特徴がないかということ、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文脈（話の流れ）にあてはまるかどうか、である。返り点は、本当はそのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？ ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにについているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

ポイントになりそうな字は、「雖（…トいへドモ）」、「使（しム）」、①・④を見ると「見」も受身の「らル」にしている。そうになると、読み方としてはいずれもアリだということになるので、句法のポイントでは絞れない。

とすると、各選択肢の書き下し文（読み方）を訳してみても文意が通るか、それが文脈にはまるかを考えなくてはならない。

①は、「これは狭くそうさせられるとはいっても」

②は、「これは狭い見識がそうさせるのだとはいっても」

③は、「これは狭いとはいっても見てそうさせるのは」

④は、「これは狭いとはいってもそうさせられるのは」

⑤は、「これは狭い見識だとはいってもそうさせるのは」

①・③・④のように「狭い」ととると、いずれも文意が微妙である。ここは、②・⑤のように、「世の詩流」が「詩の巧拙を問はず、同じきに党し異なるを伐ちて、忿争すること狂ふがごとし」である、そのような点を「狭見（狭い見識）」のなせるわざと見ているとすべきであろう。下の「亦た已だ驂ならずや」への続き方は、②のほうがよい。⑤では「そうさせる」主体が不明瞭である。

正解 33 ② (5点)

問 4 傍線部の解釈の問題 基礎

傍線部 C 「不亦已駭乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

「亦た已だ駭ならずや」のポイントは、詠嘆の公式である。

不亦 A 乎

読 訳 まタ A ナラ (A セ) ずや
なんと A ではないか

これがわかっていれば、答は一発で③になる。より公式的には「なんと愚かなことではないか」であってほしいところであるが、詠嘆形の訳は③しかない。

正解 34 ③ (5点)

問 5 傍線部の解釈の問題 標準

傍線部 D 「請観其詩」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

「其の詩を観んことを請ふ」のポイントは「其の詩」がどの詩であるかであるが、これは、当然、「白石・南郭の詩を悪く言った」「その人自身の」詩である。「白石・南郭の詩」は、筆者にとっては「知っている」ものであるうし、(注7)にもあるように「詩人としても評価されていた」のであるから、傍線部のあとの、「意を立つること陳腐にして、但だ多く生字を用ゐて、以て其の拙を掩ふのみ(＝主題の立て方が陳腐で、ただ見なれない字や言葉を多用して、稚拙さをかくそうとしているだけ)」なのは、「白石・南郭の詩」ではなく、「白石・南郭の詩を悪く言った」人物の詩である。

右の点で、答は①か③であるが、③・④は「観」るを「見なおす」としている点もキズである。

- ① 白石・南郭の詩を悪く言った者に、その人自身の詩を見せてくれるように求めた。
- ② 白石・南郭の詩を悪く言った者に、白石・南郭の詩を見せてくれるように求めた。
- ③ 白石・南郭の詩を悪く言った者に、その人自身の詩をよく見なおすように求めた。
- ④ 白石・南郭の詩を悪く言った者に、白石・南郭の詩をよく見なおすように求めた。

選択肢冒頭は共通しており、中間部には2対2、後半部にも2対2の配分があることに着目したい。

正解 35 ① (6点)

問6 傍線部以降の筆者の言葉の内容把握の問題 応用

傍線部E「余因謂曰」以下の豊山の言葉について、その内容の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

筆者は、「ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判する」ことに対しては、「白石・南郭は誠に偽詩を作り、吾子は誠に真詩を作る」と言っており、同意するかに見せている。

しかし、傍線部の前にあった、「意を立つること陳腐にして、但だ多く生字を用ゐて、以て其の拙を掩ふのみ」という評は、その「ある人」の詩に対するマイナス評価である。

「然れども」以降で、筆者は「ある人」の詩は、「真詩」といつても「真瓦」のようなものであり、「白石・南郭」の詩は、「偽詩」といつても「偽玉」であつて、比べれば、「偽玉」のほうが「真瓦」よりはるかに価値があるのだと言つて、「ある人」を批判している。

- ① 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに同意した上で、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、ある人の詩を真詩であると高く評価しており、相手の発言を重視してその詩作を承認している。△
- ② 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに対し、表面上は同意しつつも、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、「二子」の詩を評価しており、相手の言葉を用いながら逆の結論へと導いている。○
- ③ 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに同意した上で、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、「二子」の詩にも評価すべき点があるとして、相手の見解と自身の評価を調和させようとしている。△
- ④ 豊山は、ある人が白石・南郭の詩を偽詩と批判するのに対し、詩の巧拙を「玉」「瓦」でたとえることによって、ある人の詩にも問題点があることを指摘するが、相手の立場を擁護し詩作が上達するよう励ましている。×

ここも、冒頭に2対2の配分があるが、筆者は「同意しているかのように見せている」のであって、「同意している」のではない。

正解 36 ② (7点)

問7 筆者の考えを把握する問題 応用

次の【資料】は本文と同じく豊山の文章である。本文と【資料】の両方から読み取れる、詩の評価に関する豊山の考えとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

【資料】と【本文】から読み取れる筆者の考えを問うているのであるが、要は内容合致問題であるから、選択肢の中の「キズ」を探して「消去法」で解く。

「キズ」とは、次のようなものである。

- a. 選択肢に書いてあることが、本文の中にない。
- b. 選択肢の中に、本文に書かれていないことがある。
- c. 本文と似たようなことが書いてあるが、ズレている。
- d. 本文の内容に比べて、言い過ぎていたり、言い足りない。
- e. 人物や事柄の評価のプラス・マイナスが間違っている。
- f. 内容的に常識をはずれている。
- g. 漢文の世界にありがちな正しいこと、良いことが書いてはあるが、本文とは関係ない。

ここにも、選択肢冒頭に、2対2の配分がある。

- ①・③は、「世の詩人たちは、徒党を組んで詩の上手下手を争っている」
- ②・④は、「世の詩人たちは、作風にこだわって党派争いをしている」

これは、本文第二段落の、「世の詩流を視るに、詩の巧拙を問はず、同じきに党し異なるを伐ちて、忿争すること狂ふがごとし」から見ても、②・

④が正しい。

「詩の評価」については、【資料】によれば、筆者は、「其の風調の異同を問はず、佳き者は之を取る」のであって、たとえ「名人の作る所と曰ふと雖も」、「生硬・拙俗にして、諷詠するに韻致無き者（＝表現が未熟であったり、稚拙であったり、朗唱するにあたって気品や風情がないもの）」は取らない、と言っている。

これをふまえて、「キズ」をチェックする。

① 世の詩人たちは、徒党を組んで詩の上手下手を争っているが、重要なのは世間の人々の評判である。名声の高い人物の作品であっても、親しみにやすさに欠けるものは評価に値しない。

② 世の詩人たちは、作風にこだわって党派争いをしているが、重要なのは詩としての完成度である。名声の高い人物の作品であっても、風趣に乏しく稚拙なものは評価に値しない。

③ 世の詩人たちは、徒党を組んで詩の上手下手を争っているが、重要なのは作風の独創性である。名声の高い人物の作品であっても、独自の風格を持たないものは評価に値しない。

④ 世の詩人たちは、作風にこだわって党派争いをしているが、重要なのは表現の平易さである。名声の高い人物の作品であっても、奇をてらった作為が目立つものは評価に値しない。

正解

37

②

(8点)